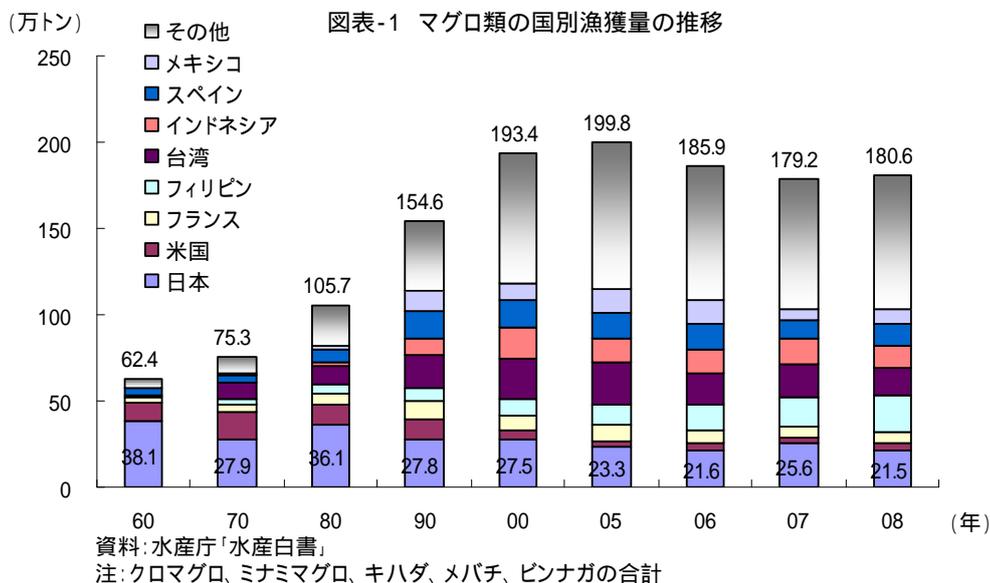
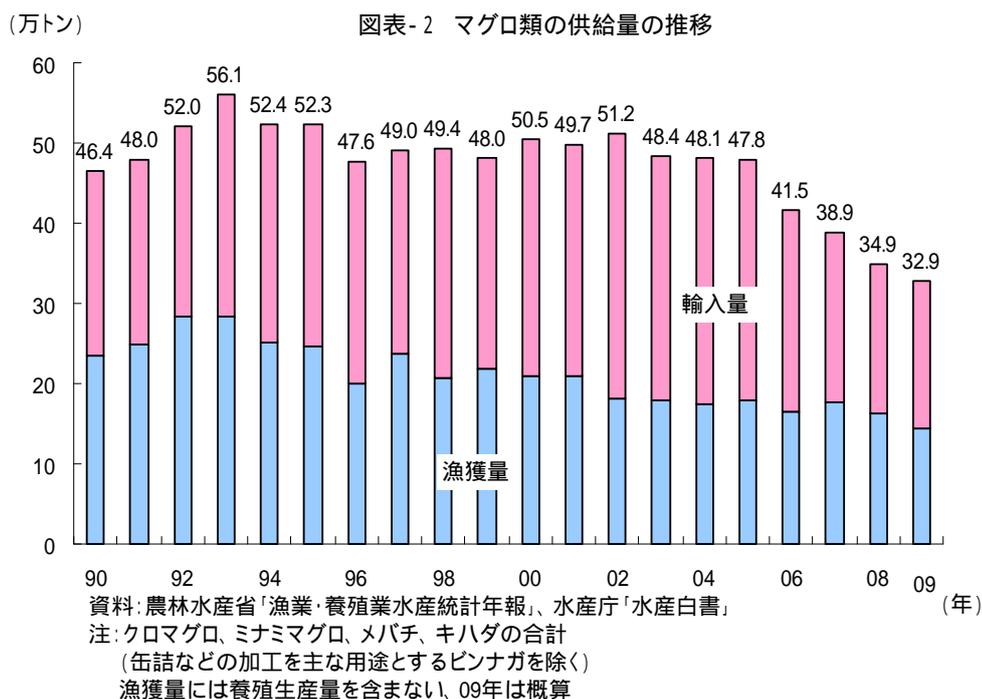


## 1. マグロ需給の動向

世界のマグロ類漁獲量は、2008年に180万6,000トン、うち日本が21万5,000トン(11.9%)で1位となっている(図表-1)。総漁獲量は増加し続けたが、2005年頃に約200万トンでピークとなり、その後は減少傾向にある。遠洋漁業の衰退で米国やフランスなどが減少したものの、近年はフィリピンやインドネシア、メキシコなどの新興国が漁獲量を増やしている。



わが国へのマグロ類供給量(漁獲量と輸入量の合計)は、2009年に32万9,000トンでピーク時の1993年より約4割減少している。2005年頃までは、漁獲量が徐々に減少したものの、輸入で補い、全体の供給量は年間50万トン前後で推移していた(図表-2)。日本は近年、世界最大のマグロの消費国として、国際ルールに基づいた輸入量の削減を行っており、今後も輸入量の減少が予想される。

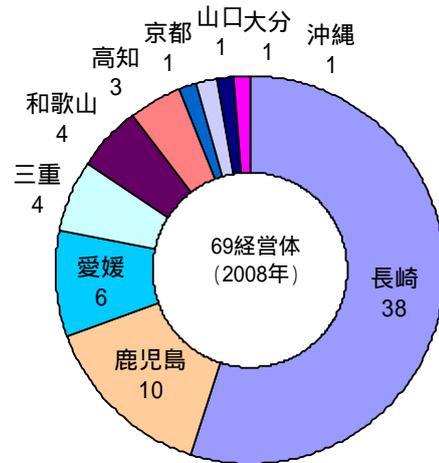


## 2. 国内マグロ養殖の現状

国内のマグロ養殖に関する統計データは、ほとんど未整備であるが、漁業センサスによる経営体数は、2008年に69先となっている。都道府県別に見ると、長崎が38先、鹿児島が10先、愛媛6先など西日本に集中していることがわかる(図表-3)。

また、各種資料やヒアリングによる養殖クロマグロ生産量は、2010年に約9,000トン、生産額は、315億円とみられる。2011年には、1万トンの大台を超え、オーストラリアを抜いて世界一の養殖マグロ生産国になる見通しだ(図表-4)。

図表-3 マグロ養殖を営んだ経営体数



資料:農林水産省「漁業センサス」

図表-4 県別養殖クロマグロ生産量推計 (単位:トン)

	03年	06年	07年	08年	09年	10年
鹿児島	1,500	2,000	1,800	3,200	3,200	3,200
長崎	300	600	1,100	900	1,500	2,200
熊本	-	-	-	-	600	1,750
三重	100	300	700	700	700	700
沖縄	300	300	350	400	400	400
愛媛	-	-	50	100	100	250
和歌山	100	200	100	200	300	200
高知	100	100	100	150	300	150
その他	-	-	-	50	100	150
合計	2,400	3,500	4,200	5,700	7,200	9,000

資料:水産庁、愛媛県、長崎県、みなと新聞、水産経済新聞資料からIRC推計

県別に見ると、1位が鹿児島で3,200トン、2位が長崎で2,200トンとなっている。近年は、熊本や愛媛などでも大企業や地場業者の参入が相次ぎ、生産量の増加が目立つ。

## 3. 愛媛のクロマグロ養殖の現状と見通し

愛媛でのクロマグロ養殖は、2005年に始まり、宇和海の日振島や嘉島、愛南町沖などで行われている。2008年漁業センサスによる経営体数は6先だったが、ヒアリングなどから推定すると、2010年には10先、従事者数が100名程度いるとみられる。愛媛の経営体は、産地流通業者が中心になって生産者組合や有限責任事業組合(LLP)を設立していることが多いが、いずれも小規模な経営体である。

推計による2010年の生産量は250トン、生産額6億3,000万円とみられ、前年比2倍以上となった。今後、順調に生産量が増えれば、2012年には生産量1,100トン、生産額27億5,000万円となる見込みだ(図表-5)。

図表-5 愛媛の養殖クロマグロの生産量・生産額の推移

	07年	08年	09年	10年	11年 (見込み)	12年 (見込み)
生産量(トン)	50	100	100	250	500	1,100
生産額(億円)	1.3	2.5	2.5	6.3	12.5	27.5

資料:IRC、2011年以降は見込み

#### 4. 愛媛のクロマグロ養殖の特徴

愛媛のクロマグロ養殖の特徴として、生産面では、マダイやハマチなどの養殖業者や産地流通業者、試験研究機関の集積と、長年培われた魚類養殖のノウハウを活かせる強みがある。漁場環境は、宇和海の平均水温が鹿児島や長崎に比べて低く、魚の成育が遅いという弱みもあるが、半面、黒潮の定期的な流れ込みで海水交換がなされ、水質の良い状態が保たれているという強みもある。

流通面では、産地流通業者の持つ流通ネットワークや設備を活用できる強みがある。産地流通業者は、マダイやハマチなどの既存取引先を中心に販路を確保している。しかしながら、生産量自体は、鹿児島や長崎などの主産地に比べるとまだ少なく、安定供給が難しいことや価格決定権に乏しいという弱みもある。

#### 5. 愛媛のクロマグロ養殖の課題

課題として、資金面では、マダイやハマチに比べて多額になる投資や運転資金を確保するため、しっかりとした資金計画や大企業との連携が必要である。また、販売面では、他産地・大手業者との競合が激化する中で、産地一体となった生産・出荷体制の確立や販路開拓が求められる。

生産面では、規模拡大や新規参入が相次ぎ、新たな養殖漁場を確保することが難しくなりつつあり、海水温や潮流の調査などを行ったうえで養殖適地の開拓が必要である。稚魚の確保では、天然ヨコワの資源保護と人工種苗の量産化・安定供給が急がれる。

おわりに

マグロ養殖は、底堅い需要と漁獲規制の強化を背景に、拡大・発展が見込まれるものの、課題も多い。愛媛にとっては、マダイ、ハマチを軸にした魚類養殖業にマグロが加わることで、業界の活性化、日本一の魚類養殖県としてのさらなる発展が期待される。今後の国内・県内マグロ養殖の動向と展開に注目したい。

(新藤 博之)